

「常備軍と官僚制の発達」というキーワードで理解されることが多いが、当時は芸術においても「官僚化」といふべき現象が進行していたのである。

第五章「自己主張」及び第六章「勝利の時代」では、親政を開始したルイが、自らも積極的にイメーヅ創出に乗り出していたことが明らかにされる。この時期、戦争での勝利によって栄光を誇示しようとしたルイは、お気に入りの芸術家や歴史家を戦地にまで連れて行ったのである。

次に第七章「システムの再構築」では、オランダ戦役後、ヴェルサイユに定着するようになったルイによって行われた様々な儀礼行為と、イメーヅ形成の関連が検討される。加えて、後世には批判されたナントの勅令の廃止が、クローヴィスや聖王ルイ九世にも比肩すべき異端根絶の功績として公式には賛美されていたことが示される。続く第八章「日は沈む」では、栄光に翳りが見え始めた晩年のルイと、彼の全能ぶりをもはや強調することのできなくなったイメーヅ政策との対比が描かれている。

第九章以降は、前章まででフォローしきれなかった点を論じたものになっている。

まず第九章「伝統的表現の危機」では、一七世紀に拡大しつつあった知的革命により、知識人の間で神秘的なものの見方が衰退していく中、ルイのイメーヅ創出がこうむった影響が、一〇章「メダルの裏面」では、ルイの治世に対して行われた国内外の批判が、実はルイを称えるために創られた公式のイメーヅをパロディ化したものであることが示される。また、一章「ルイ一四世の受容」では、ルイのイメーヅに対するパリと地方の上流階級、外国の宮廷の反応が紹介される。最後に第二章「比較のなかのルイ一四世」では、ルイのイメーヅの系譜論が展開されている。フェリペ四世やコジモ・デ・メディチ等、ルイに影響を与えたとされる君主の紹介と、二〇世紀の統治者達が行ったプロパガンダ政策との比較が行われ、本書の考察は終わる。

いずれの章も、著者が持つ該博な知識、方法論的な面白さが存分に盛り込まれており、図版の挿入も豊富である。加えて、意外な人物が意外な形でルイのイメーヅ創出にあるいはその批判に関わっていることが明らかにになる点も、本書の魅力の一つであろう。

ただ、フォローしている領域が広い分、個々の分析については今ひとつ掘り下げが足りない印象を受ける。また、図像史料の解釈に関して、他の研究者の見解がそれほど紹介されていない点も少し残念である。とはいえ、現代の政治文化との関連も視野に入れて考察がなされた本書は、訳者石井三記氏による読みやすい日本語訳と分かりやすい専門用語の解説が加わって、専門分野の垣根を越えて読者を獲得しうるだけの素地を持っている。一読をすすめたい。

(A5版 二九二頁 二〇〇四年八月)

名古屋大学出版会 税別四二(〇〇円)

(山中聡 京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

川田 稔編

『浜口雄幸集』

資料集に接する喜び、読み解く快樂というものを、歴史家を志す者は誰もが知っている。ただ、そこから論考を構築していく楽しさまで与えてくれる資料集は、そう多くない。ここで紹介する川田稔氏編纂の

『浜口雄幸集』二冊は、間違いなくいくつもの論考を生み出す可能性を持つ資料集である。

浜口は、大局を明晰に語れた数少ない政治家の一人であった。同時に、悲劇的な環境の中で、政治家として多くの苦悩に身を置いた人でもある。この資料集は、第一冊目に彼の「論述・講演」を、二冊目に「議會演説」を集めて、その足跡をたどる。主に一九一五年から三一年までのものであるが、政治家とその構想を取り囲む歴史構造との間に、いかに残酷な関係が横たわっているかを、読む者にあからさまに見せつけている。

介
浜口の活躍した時代は、軍事的な明治型国家形成が終わり、政党政治のもとで国際協調と経済発展を課題とした国家に転換していった時代であった。原敬が成立させたその路線を、浜口は徹底的に推し進めた。大蔵省出身で財政に明るく、平和がいかに経済に資するかを良く知っていた彼は、政党政治こそが日本の進むべき道であると確信していた。彼の口からは、幣原外交と井上財政のセットの意味や、中国政策・金解禁・ロンドン海軍軍縮条約・産業

政策・普通選挙制度がどのようにこの転換とかかわるのかが、明確に語られている。

ところが、彼が進めようとしたこれらの諸施策は、大恐慌という世界資本主義の崩落の大波に呑み込まれた。その後には、超国家主義に覆われた不幸な時代がやってくる。議院内閣制を確立し、世界の中の日本を樹立しようとした彼の意図とはまったく逆に、日本近代史上の負の節目を、結果的に彼の内閣は作ってしまったのである。

大局観にもとづいた思索と政策が、環境の悪化に押しつぶされていくさまは、資料を読み進む者を息苦しくさせるほどである。政治ならびに政治史と向き合う者にとって、きわめて多くの学ぶべき事柄がここにある。われわれは日本近代の脱皮の苦悩を、臨場感をもって追体験することができ、それによって前後に位置する明治と昭和前期の輪郭も、明確に理解できるようになる。日記や書簡集は事実の機微を見出すのに役立つが、政治構想・国際構想を把握できることはまれである。本資料はその構想をこそ読み取るためのものであり、そこから見えてくる地平は広い。

このような資料集を編むことができたの

は、編者川田稔氏が、資料から論考を生み出す名手であることによるのだろう。資料集を生命あるものとするかどうかは、所詮編者の研究者としての力量にかかっている。

氏による巻末解説は、浜口の経歴と国家構想を詳述したもので、この資料集から生まれた最初の論考である。浜口研究のための概説として、つまり政党政治期研究の手引きとして、きわめて有用である。実証的研究手法を「資料をして語らしめる」という言い方で表現することがあるが、そこには資料を読み解く緻密な考察と大胆な構想がなければならぬことを、この解説は容易に理解させてくれる。その意味からも一読に値する。

(全二巻 A5版 未来社 論述・講演篇Ⅱ六三四頁 二〇〇二年二月 税込一五七五〇円／議會演説篇Ⅱ七五六頁 二〇〇四年五月 税込二六二五〇円)

(斎藤聖二 茨城キリスト教大学教授)